



さざんか

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第5号(R5. 4. 28)

今年は「時鳥」の鳴き声が例年より早く聞こえてきます。「時鳥」一何と読みますか？ そう、ホトトギスです。初夏に南から渡ってきて、夏のおとずれを告げる鳥です。ホトトギスはまた日本人にとって大切な「時」を教えてくれる鳥でもあります。「田植えをしていいよ」という時を知らせてくれます。そして、もう夏が始まります。

体育祭ブロック長のメッセージ

本号から3回に分けてブロック長のメッセージを掲載します。ブロック長の熱意や意気込みを受け止めましょう。

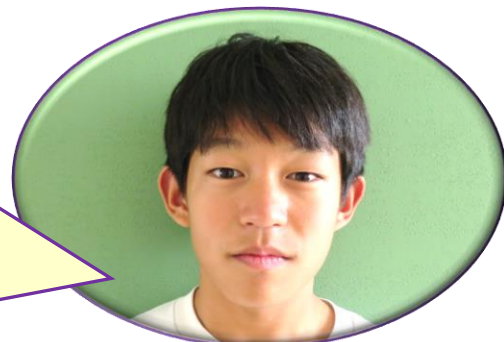
【青ブロック長 久田 心優 さん】

青ブロック長になりました久田心優です。私は今年の体育祭は、全員が全身全霊で楽しめるものにしたいと思います。そのために、メリハリや周りを見てすぐに行動することを大切にしたいと思います。そして、ブロック全体で盛り上げていきましょう。9年生は中学校では最後の体育祭です。悔いの残らないように全力で頑張っていきましょう。7・8年生はまだ慣れないことはたくさんあると思います。そんなときはぜひ私達を頼ってください。みんなで体育祭を最高のものにしましょう！



【青ブロック長 沖野 蒼太 さん】

この度、青ブロック長になりました沖野蒼太です。僕は今年の体育祭を全員が「最高の体育祭だった」と言えるような体育祭にしたいです。そのためにはまず、自分から積極的に声を出し、みんなをまとめられるように頑張ります。そしてダンスをとってもかわいくしてブロックコンクールでは、必ず青ブロックが金賞を取るのを皆さん楽しみにしてください。最後に青ブロックのみなさん、一緒にブロック優勝できるように頑張らしましょう！他のブロックも河東中生一致団結して、みんなで体育祭を成功させましょう！



【緑ブロック長 林 愛莉 さん】

こんにちは。緑ブロック長の林愛莉です。今回の体育祭では、7年生は初めて、8年生は後輩から先輩になって、9年生は最後の体育祭で、それぞれいろいろな思いがあると思います。だからこそ私たち、ブロック長を中心としてブロックリーダーと一緒に積極的に動いていきたいです。そして、どのブロックよりも団結力を高めて、他学年同士でもみんなで応援できるブロックをつくって行きたいです。体育祭練習中、誰も嫌という思いをせず、みんなが楽しかったと言ってもらえる最高の体育祭にしたいです！



【緑ブロック長 甲斐 月翔 さん】

こんにちは、緑ブロック長になりました9年2組の甲斐月翔です。僕はこの体育祭で、楽しいことばかりじゃないと思うけど、最後は笑顔で終われる体育祭にしたいです。そのために、練習の1分1秒を大切に、最高のパフォーマンスができるようにしたいです。9年生にとっては、初めて保護者が直接見に来てくれる体育祭なので頑張らしましょう。そして、今までで一番楽しい体育祭をつくるために僕が一番声を出して動けるようにしたいです。体育祭までの間よろしくお願いします。



目の前に助けを求める人がいたらどうするのか？

～ “アジアのノーベル賞” を受賞した眼科医・服部匡志さんの生き方～

アジアのノーベル賞と言われる「マグサイサイ賞」というのがあります。過去にはマザー・テレサやダライ・ラマ14世、日本人では中村哲さん（昨年度の学校だより第44号で紹介）が受賞しています。この賞の昨年度の受賞者は日本人の眼科医師・服部匡志（はっとり ただし）さんでした。ある雑誌に服部さんの特集記事がのってましたので、その一部を紹介します。

服部さんはこれまで20年にわたってベトナムと日本を行き来して、失明しそうな患者の目を治療してきました。日本の病院で手術をし、お金を貯めて、ベトナムの患者さんを無償で救い続けてきました。ベトナムでおよそ6千人の失明を防いできました。

20年前赴任したベトナムの首都ハノイの眼科専門病院では、朝7時半に病院に行くと、すでに待合室のろうかには患者さんでいっぱいです。一日平均で50人くらいを診察し、終わり次第手術に入ります。しかし、ベトナムは毎日2時間のお昼寝の習慣があり、「2時だ、手術開始時刻だ!」と叫んでも誰も動きません。おまけにスタッフは夕方4時の定時になれば手術が残っていても帰り支度を始めます。

地方の患者さんの多くは貧しさゆえ、症状が悪化してようやく手術に来ます。子どもの網膜剥離（もうまくはくり）の場合本人がすぐ言わないで、物にぶつかり始めてから親が気づく。病院に行けば何とかかなると思いき、遠方に住む親子は一昼夜かけて、すしづめのバスに乗ってきます。そこから長い順番待ちです。

やがて治療資金が底をついた服部さんは、マイホーム購入のために貯めておいたお金で治療器具を購入します。「眼内内視鏡があれば年間千人の目を救える」と奥さんを説得しました。

ある日、長い黒髪の少女が母親に手を引かれ、恐る恐る診察室に入ってきました。顕微鏡で目をのぞくと、右目はすでに失明していて、左目もほとんど見えていません。日本の病院でもふつうは回復するみこみはほとんどない状態でした。

手術費用は最低300ドル（約3万円）とスタッフが伝えると、「そんなにかかるなら受けたくない」と言って帰ろうとしました。しかし、服部さんは彼女をつかまえて、「手術代はなんとかする。お願いだから帰らないで」と伝えました。すでに予約はいっぱい。以前ならそくキャンセルだったでしょうが、スタッフは何も言わずに小さいすきまに名前を書き込みました。

手術は難航し、何度もあきらめそうになりました。でも、あと少し頑張ればこの子の人生が変わるなら、やるしかない。そう思い直してしばらく続けていると、奇跡的にやっかいな膜が目からとれはじめ、手術開始から3時間で少女の眼に光がもどりました。絶望が奇跡に変わる瞬間でした。

後から母親はどうしても手術代を払いたいと言ってきましたが、「そのお金で、娘さんに将来必要なものを買ってあげてください」と服部さんは返しました。

服部さんはインタビューでこう話しています。「僕の命は眼科医療を通して貧しい人に光をもたらすこと、そのためにあります。命がつきるまでこの道を行かなきゃならない。お金のない患者さんを一人でも多く救いたい。」

— 服部さんは、NPO 法人「アジア失明予防の会」を設立されています。また、この20年間で網膜硝子体手術では30人、白内障手術では50人のベトナム現地医師を育てられました。

